台大日本語文研究第 11 期
2006 年 6 月，頁 161-186
本文 2006.4.25 收稿, 2006.6.7 通過刊登

無住與兼好

曹景惠*

摘要

無住道曉於嘉祿二年(一二二六)十二月二十八日出生東國，正和元年十月十日辭世，享年八十七歲。其最初之著書『沙石集』脫稿於弘安六年(一二八三)，五十八歲，是年正值『徒然草』作者兼好之推定生年。其後，無住專心致志於『聖財集』『雜談集』等書之撰寫與『沙石集』的增補修訂工作，直到晚年仍努力不懈。雖然年紀較兼好年長約兩個世代之多，但因無住相當長壽之故，兼好的青年期與無住的老年期是相重疊的。也就是說，無住與兼好曾共存於同一時代。

先學之研究早已指出『徒然草』受到『沙石集』的影響甚深。但現存史料中卻沒有兼好與無住、或與『沙石集』接觸的確實記載。本稿則聚焦於兼好與無住兩人共通的地緣關係上，希望藉分別考察出身東國的無住生平，及與東國關係匪淺之兼好傳記，試証兩者相互關聯的可能性，作爲『徒然草』與『沙石集』兩書關聯性研究之佐證。

關鍵詞：兼好、無住、東國、『徒然草』、『沙石集』

* 景文技術學院應用日語系助理教授

A Study on Mujuu and Kenkou

TSAU Jing-huei*

Abstract

Born at Tougoku on December 28th 1226 AD, Mujuu-dougyou died on October 10th 1312 AD, being alive for 87 years. Mujuu's first book Shasekishuu is finished at the age of 58, in 1283 AD, which is also the presumed born year of Kenkou. Mujuu devoted his last 30 years on the other books, Shouzaishuu, Zoutanshuu, and the rewriting of Shasekishuu. Since Mujuu lived for a long life, his later years overlap with the young period of Kenkou.

The influence of Shasekishuu on Tsurezuregusa has been pointed out, but there is no reliable material to prove that Kenkou, the author of Tsurezuregusa, did read Shasekishuu.

This dissertation is to investigate the great possibility that Kenkou, having an intimate relation with Tougoku where Mujuu was born and lived for a life, has chances to read Shasekishuu. This study will be evidence in the research on the relevance between Shasekishuu and Tsurezuregusa.

Key words: Kenkou, Mujuu, Tougoku, Shasekishuu, Tsurezuregusa

* Assistant Professor of the Department of Applied Japanese, Jin Wen Institute of Technology

無住と兼好

曹 景惠*

要旨

無住道暁は嘉禄二年（一二二六）十二月二十八日に東国で生まれた。最初の著書『沙石集』は弘安六年（一二八三）五十八歳の時の著述であるが、その成立年次はちょうど兼好の推定生年に当たる。無住はその後、『聖財集』『雑談集』の執筆や『沙石集』の添削等に力を注ぎ、およそ三十年近く生き続けて、正和元年（一三一二）十月十日に八十七歳で没したと伝えられている。兼好より二世代ほど年上であるが、相当に長生きしたので、兼好の若年期と無住の晩年は重なり合うことになる。

『徒然草』と『沙石集』との関わりが甚だ深いものであることはすでに先学研究に指摘されてきたものの、兼好は『沙石集』を参看したことを証明できる史料は現存しない。『沙石集』と『徒然草』との関係を検討する前提として、本稿は東国出身の無住の生涯と、東国と親密な繋がりを有する兼好の伝記をそれぞれ考察し、両者の出会いの場となり得る共通の地縁について検討する。

キーワード：兼好、無住、東国、『沙石集』、『徒然草』

* 景文技術学院応用日語系助理教授

無住と兼好

曹景惠

一、はじめに

無住道暁は嘉禄二年（一二二六）十二月二十八日に東国で生まれた。最初の著書『沙石集』は弘安六年（一二八三）五十八歳の時の著述であるが、以後も『聖財集』『雑談集』の執筆や『沙石集』の添削等に力を注ぎ、およそ三十年近く生き続けて、正和元年十月十日に八十七歳で没したと伝えられている。兼好より二世代ほど年上であるが、相当に長生きしたので、兼好の若年期と無住の晩年は重なり合うことになる。

『沙石集』は草稿の段階で早くも都鄙の人々に披露され、「讃敗相半歟」という評価を集めたという[1]。無住はかかる世評に刺激されて「讃敗相半」という賛否両論の状態から脱するために、晩年まで本文の添削や説話の再編成につとめた。その間に、「讃敗」の度合に変化があったか否かは不明であるが、永仁元年（一二九三）から三年にかけて京都で道恵の手によって書写され[2]、そして、嘉元元年三月に道恵は『沙石集』を道証に渡し、京都西方寺において『沙石集』を再度書写することが流布本『沙石集』の識語により確認されており[3]、『沙石集』の世間における声望はさらに高まっていったものと

1　「先年沙石集、病中ニヲカシゲニ書散シテ、不レ及ニバ再治シテ、世間ニ披露、讃敗相半歟」（『雑談集』中世の文学、三弥井書店、1976 年）。「不意ニ草案ノマヽニ洛陽披露。闇顕ニツケテ其憚多シ」（流布本沙石集巻第二）、「此物語先年草案シテ。未及清書之処。不慮ニ都鄙披露」（流布本沙石集巻第四）。流布本沙石集の引用は深井一郎編『慶長十年古活字本沙石集総索引－影印篇－』（東京：勉誠社、1980 年）に拠った。

2　流布本沙石集に「正応第六之暦癸巳季春下旬之候於洛陽西山大原野之邊書写畢（中略）片山貧士」（巻第一末）、「永仁第二之暦甲午孟春初之六日於洛陽正親町油小路書写之畢　片山貧士」（巻第二末）、「永仁第三之暦乙未孟夏初九日於西山大原野之畢　片山貧士道慧春秋四十六」（巻第三末）、「永仁第二暦甲午中春始之三日於洛陽正親町油之小路書写畢」（巻第四末）、「永仁第三之暦乙未孟夏中之六日於西山大原野而写畢　片山貧士道慧」（巻第五末）、「永仁第三之暦乙末孟夏後七日　於西山大野書写了　片山貧士道慧」（巻第六末）、「正応第六之天癸巳仲夏初二日於洛陽土御門油小路書写之　片山貧士」（巻第八末）などの識語が見出される（『慶長十年古活字本沙石集総索引―影引篇―』）。

3　流布本沙石集の各巻末に「乾元二暦癸巳季春之候此書道證上人奉渡畢　道慧」

想像される。

『徒然草』と『沙石集』との関係については、早く黒田亮氏が両書の間に共通記事がいくつか存することを注意されている[4]。実際、『沙石集』と『徒然草』とを丹念に読み較べるならば、知識・関心の広さと多彩さ、特定の思想に捉われず、よかれあしかれ柔軟な精神、人間のおかしさに独特の視線を向け、聖なるものと滑稽とを同じ視野でとらえようとする志向など、両者の類縁の多さは容易に気付かれるところである。中世の隠者文学をめぐるある座談会において、木藤才蔵氏は「『沙石集』の世界というのが存在していたからこそ、この『徒然草』の世界が可能になったということは言えるのではないか」と述べられているが、三木紀人氏はこの木藤氏の見解に賛意を示され、「『宇治拾遺』的世界をさらにその前に置くなら、『徒然草』を生むに至る系譜が浮かび上がってくる」という見通しをも提示されている[5]。『沙石集』を随筆に転移する一歩手前にある説話評論の書として位置付ける見方があるが、文体・表現の手法・自己を省察する発想の諸点において、『徒然草』は『沙石集』に負う部分が少なくないと認められるのである[6]。

『徒然草』と『沙石集』との関わりが甚だ深いものであることは広く認められる一方で、『沙石集』ないし著者無住の名が『徒然草』の中には言及されず、兼好は『沙石集』を参看したことを証明できる史料も現存しない。いったい兼好はどのような場を通じて無住と連関し、『沙石集』を手にすることができたのだろうか。この問題に関して三木紀人氏は、東国出身の無住と、関東に深い由縁があって知人も多い兼好との間にあった共通の地縁を考慮するならば、兼好

という識語が存する。また、巻第七の末に「于時乾元第二之暦癸卯季春初之六日於洛陽之西山西方寺重又一部書写之次此巻奥一枚書改之畢　片山隠士道慧春秋五十四」、巻第九の末に「于時乾元第二之暦癸卯季春初之六日於洛陽之西山西方寺重又一部書写之次此巻前後一枚書改之畢片山隠士道慧春秋五十四」という書入が見出される（『慶長十年古活字本沙石集総索引―影引篇―』）。

4 黒田亮「無住と兼好」『文学』第7巻第6号、1939年6月、94-96頁。

5 伊藤博之司会『中世の隠者文学　シンポジウム日本文学六』（東京：学生社、1976年）。

6 西尾光一『中世説話文学論』（東京：塙書房、1963年3月）。

が『沙石集』に対して全く無縁であったとは考え難いと述べられ[7]、極めて示唆的な指摘であるように思われる。『沙石集』と『徒然草』との関係を検討する前提として、本稿では兼好と無住との関係に焦点を据え、東国出身の無住の生涯と、東国と密切な繋がりを有する兼好の伝記をそれぞれ考証し、両者の出会いの場となり得る共通の地縁について考察を加えたい。

二、無住の伝記について

無住の生涯について記す資料を第三者の手に成る同時代の文献に見出すことはできない。無住の伝記として、江戸時代に成立した『無住国師道跡考』『無住国師行状』などがあるが、それらに記された内容が確実な資料に基づくものであるかは信憑性が問われる。故に、無住の伝記研究は、主に彼が撰した『雑談集』『聖財集』に自ら記した記事、とくに自伝的記事を多く含む『雑談集』巻三の「愚老述懐」に頼るしかない。以下、それらの記事を踏まえて無住の生涯を辿ってみる。

「愚老述懐」に拠ると、無住は嘉禄二年（一二二六）の出生であるというが、親が何者であるかは不明で、その家系について、

> 然ルニ、先祖鎌倉ノ右大将家ニ、召仕ヘテ、寵臣タリト云ヘドモ、運尽キテ夭亡シ了ンヌ。仍テ其ノ跡継グ事ナシ[8]

と記しており、梶原氏の後裔とされている[9]。梶原氏は東国政権で重きをなしていたが、無住の誕生は景時が駿河で誅殺され、一族が勢力を喪失して沈淪した時代に相当する。『雑談集』巻五の「天運之事」に、

> 愚老幼少ヨリ、親シキ人ニ養ハレテ、父母ノ養育カツテナシ、棄子ノゴトクナリシカドモ、

---

[7] 三木紀人「隠遁文人の世界　徒然草」（日本文学協会編『日本文学講座七　日記・随筆・記録』東京：大修館、1989 年）、256 頁。

[8] 『雑談集』巻三「愚老述懐」。本稿では『雑談集』の引用は山田昭全・三木紀人校注『雑談集』（中世の文学、東京：三弥井書店、1973 年 9 月）に拠った。

[9] 三木紀人「無住の略伝」『無住・虎関』（大乗仏典　中国・日本篇、三木紀人・山田昭全訳、東京：中央公論社、1989 年 12 月）、352 頁。

そして、『雑談集』巻三の「愚老述懐」に、

十三歳ノ時、鎌倉ノ僧房ニ住シテ、十五歳ノ時、下野ノ伯母ガ許へ下り、十六歳ノ時、常州へ行テ、親キ人ニ被レ養、十八歳ニシテ出家シ、二十許ノ年、師匠房ノ譲給シカバ、ナマジイニ請取テ住シナガラ、世間不階ニシテ、執心ナク侍シママニ、事ノ次ヲ以テ、二十七歳ノ時、住房ヲ律院ニナシテ、二十八歳ノ時、遁世ノ身ト成テ、律学六年、

と回想するように、両親とも早く死別したため、十五才で下野の伯母（景時の娘）の保護を受け、まもなく常陸に移り、十八才で出家した。その後、西大寺流の法恩寺に住し、二年後に住職を譲られたが、建長四年（一二五二）西大寺派律宗の忍性が教線拡張のために鎌倉に下向したのをきっかけに、住房を律院に改めた。

師匠ノ恩徳経テモレ生ヲ難シレ忘レ。幼年ニ三井寺ノ圓幸教王坊ノ法橋ニ、倶舎頌疏処々聞クレ之。二十歳ノ時、法身坊ノ上人玄義聞クレ之。二十九歳、実道坊上人ニ止観聞クレ之。於テニ菩提山ニ、法相ノ法門要処少シ聞クレ之。（「愚老述懐」）

と自ら述べるように、無住は二十代を通して修行に励み、教王坊円幸、法身坊と実道坊の三人に、それぞれ『倶舎頌疏』『法華玄義』『摩訶止観』を学んだ。この中で、実道坊は『西大寺叡尊伝記集成』所収の「授菩薩戒弟子交名」に名前が見出され、叡尊の弟子である。実道の手引によるか、または忍性との接触に関係してか、無住ははじめて西上し、南都で六、七年の間、律学を中心に勉学した。そして、

三十五歳、寿福寺ニ住、（中略）坐禅ナト行シ侍リシカ、一年マテモナクシテ、脚気持病ニテ、坐禅心不レ叶」（「愚老述懐」）

と記すように、三十五歳の時に鎌倉寿福寺の長老悲願坊朗誉の下で参禅したが、脚気発病のために挫折、再び西上し、大和の菩提山正暦寺に入り、東寺三宝院流の真言密教を受け、法相宗の法門などを学んだ。無住は『雑談集』の奥書などで「東寺末流金剛仏子道暁」

と自署しているが、このことに基づくものかと考えられている[10]。

弘長二年（一二六一）二月、西大寺の叡尊は北条実時の招きで鎌倉へ下向する折りに、尾張国の山田氏の氏寺である長母寺に滞在した。同年、三十七才の無住は同じ尾張の長母寺の住持となり、以後、没するまでの約五十年間のほとんどを長母寺で過ごすこととなった。長母寺入りの経緯については「愚老述懐」の中でも具体的に語られず、「当寺ニ有ㇾ二因縁一故歟。相通ㇷ事四十三年」としか述べていないが、彼がかつて常陸において西大寺流の教線に接していたことと関係があるのだろうと推測されている[11]。弘長二年叡尊の関東下向を随行の弟子性海が記録した『関東往還記』には、叡尊と長母寺を結びつける仲介役たる者として、「道篋」という常陸国三村寺の僧の名が出てくる。「道暁」という無住の諱と「道篋」との音の類似から、両者は同一人物かと考えられている[12]。おそらく無住は叡尊との繋がりを機縁として、常陸出身の西大寺流律僧として長母寺の住持になったのであろう。しかしながら、その一方で、無住自身がまもなく西大寺流と疎くなり、東福寺の弁円へ帰依したため、「愚老述懐」の記事の中においても長母寺入りの事情を曖昧にしたのではないかと想像されるのである[13]。

無住の時代、西大寺流の真言律宗と同様にめざましく教線を延ばしつつあったのは、東福寺派の臨済禅である。東福寺は寛元元年（一二四三）に、藤原道家の請いで円爾弁円によって開かれた、禅密兼修を旨とする臨済宗の寺である。東福寺開山の円爾は、建仁二年（一二〇二）に駿河に生まれ、奈良・京都の各寺で諸宗を修学し、のちに、栄西の法嗣、上野長楽寺の栄朝に付いて禅を学び、鎌倉寿福寺の行勇に東密を受けた。無住の生まれた前年、嘉禄元年（一二二五）

[10] 三木紀人「沙石集・雑談集」『説話集の世界Ⅱ－中世－　説話の講座 5』（本田義憲［ほか］編、東京：勉誠社、1993 年）、112 頁。
[11] 同上。
[12] 小島孝之校注・訳『沙石集』（新編日本古典文学全集 52、東京：小学館、2001 年 8 月）の解説、623 頁。
[13] 三木紀人「無住の略伝」『無住・虎関』（大乗仏典　中国・日本篇、三木紀人・山田昭全訳、東京：中央公論社、1989 年 12 月）、354-360 頁。

入宋し、径山の仏鑑無準禅師に師事して中国の臨済禅を学んだ。在宋六年にして帰朝し、その後、九条家の帰依を受けて東福寺第一世に請ぜられ、門下に「度門弟子無慮千万人」[14]と称されるほど、当代屈指の名僧であった。

無住が円爾の門弟となった時期ははっきりしないが、東福寺第二十七代の守仙彭叔の『鉄酸餡』の記事[15]に拠ると、およそ無住が四十代以降のことと推測されている。

> 其後東福寺ノ開山ノ下ニ詣シテ、天台ノ灌頂・谷ノ合行・秘密灌頂、事ノ次ニ伝了。大日経〻義釈・永嘉集・菩提心論・肝要ノ録ナド聞キ了ヌ。（中略）併開山ノ恩徳也。宗鏡録退披覧、開山ノ風情、宗鏡録ノ意也。仍テ処々思合セ侍リ。(「愚老述懐」)

と自ら述べるように、無住は東福寺に入って、谷流の秘密灌頂をはじめ、『大日経』『永嘉集』『菩提心論』などを学んだが、師円爾の恩徳で『宗鏡録』の閲覧を許され、師の教えが『宗鏡録』に符合することを知ったのである。円爾は禅教一致を説き、密教への帰依も深く、旧仏教諸宗の高僧たちとも連携を保ち、宥和的であったが、若い頃に法相・華厳・真言・禅など多方面にわたって学んだ無住はかかる師匠の宗風を継承し、各宗派に対して比較的自由な立場に立ち、諸宗の実は一に帰入して同一であることを唱えた。無住の反専修・反選択・諸宗宥和の思想的立場は、『沙石集』『雑談集』などの著書に如実に示されている。

後半生の無住は著作活動に精力を注ぎ、『沙石集』『聖財集』『妻鏡』『雑談集』を遺している。最初の著書『沙石集』は、弘安二年（一二七九）、五十四才の時に筆を起こし、同六年に完成したが、執筆の途中、二、三年にわたる中絶期間のあったことが巻末に記されている。その中絶に至る事情は、師の円爾が弘安四年（一二八一）年十

---

[14] 『聖一国師年譜』(弘安四年編)。本稿では石山幸喜編著『聖一国師年譜』(静岡：羽衣出版、2002年7月）に拠った。

[15] 「歯不惑に逮びて已後、吾が東福聖一国師の笏室に入り、朝参参請、遂に許可を蒙る」。『鉄酸餡』の引用は三木紀人「無住の世界―『沙石集』『雑談集』―」『日本の説話3　中世Ⅰ』(永井義憲・貴志正造編、東京：東京美術、1973年)、255頁に拠った。

月十七日に死去したことと大きく関係すると推測されている[16]。『沙石集』の思想的立場は、一宗一派にとらわれず、古今東西の話題を聖俗の別なく採用して、顕密禅教の宥和、三教の一致を唱えるところにある。収録された説話には、仏典由来の話、中国、天竺などの異国の話、無住自身の体験談、洛陽・南都での見聞譚などが見られるが、これに加えて、東国、とくに無住が少年期と修行時代の一時期を過ごした鎌倉と常陸国周辺の話が多く見られることが特徴的である。無住が常陸、下野など東国の各地や比叡山・南都七大寺・熊野・善光寺・高野山・四天王寺・橘寺・法隆寺などの諸寺を度々訪ねていることは『雑談集』の記事[17]によって知られるが、『沙石集』における説話の収集圏は、東国を含む如上の移動圏とよく重なっているのである。最晩年まで無住は『沙石集』の改稿に努めていたが、収録説話の取捨、添削などの作業を通じても、無住が幾度も東国を訪れ、東国と関係を保ち続けていた事情が窺われるのである[18]。

僧侶という身分に加えて、東福寺派医術の祖として無住の名が「日渉記」明応八年（一四九九）四月十二日の条[19]に伝えられている。「日渉記」の記事の信憑性は無住とほぼ同時代の史料『覆載萬安丹』（梶原性全著。正和四年から嘉暦二年頃に成立）によって確認され、無住が東福寺において医療を担当し、医術を伝授する上で大きな役割を果たしていたことが、小島孝之氏の考察[20]によって解明されている。医師を本業とはしていないものの、無住は医薬に関する専門的な知識と技術を持ち、医療行為の実践も行ったと考えられるのであ

[16] 三木紀人「無住の略伝」『無住・虎関』（大乗仏典　中国・日本篇、三木紀人・山田昭全訳、東京：中央公論社、1989 年 12 月）、361 頁。
[17] 「洛陽諸国の処々の名所、霊寺、霊社、山門・南都の七大寺、…大仏、…熊野、…善光寺、…高野、…西天王寺、…橘寺、…法隆寺・御廟窟」（『雑談集』巻三「愚老述懐」）。
[18] 小島孝之「無住の説話受容と東国文化圏」国文学解釈と鑑賞』通巻 858、2002 年 1 月号、130-135 頁。
[19] 「哲蔵主来。治眼疾。煖銅筋以熨目旁。而後入真珠散。予問曰。何派哉。曰。東福派也。聖一之嗣在尾張者。諡曰一円禅師。諱道暁。字無住。著沙石十巻者也（後略）」。「日渉記」の引用は『鹿苑日録』第一輯（辻善之助編、東京：太洋社、1934 年）に拠った。
[20] 小島孝之「無住伝記小考―医術と思想とをめぐって―」『国語と国文学』52 巻 12 号、1975 年 12 月、41-53 頁。

る。

無住は東国出身で、終世東国文化圏にいた人と言えよう。東福寺入山後、『宗境録』を熟読し、師匠円爾の諸宗宥和の思想を忠実に受け継ぎ、禅教融合、三教一致の説を著作に繰り返し唱えた。著書『沙石集』に採録された説話の発生場所や説教の内容にも、かかる無住の活動範囲と思想的立場が鮮明に映し出されているのである。後世の無住伝『無住国師行状』では、後宇多天皇の詔を請けた一条実経から東福寺第二世、つまり師円爾の後継者として招かれること三度、遂に固辞し、東海の地を去ることがなかったと伝えるが、「無慮千万人」と言われる円爾のおびただしい門弟を措いて、特に無住が抜擢される必然性は見出されず、無住の同時代にそれを証する資料は一切存在しない。この伝承は無住が『沙石集』などの著者として有名になって以後に発生したものとするのが穏当であるが、無住は東福寺との縁が深く、寺内の普門院の書庫に出入りする特権をも確保するなど、師からよほどの厚誼を受けていたことがその背景にあったものと想像されるのである[21]。

三、兼好と東国との関わりについて

本節では兼好の伝記を略述し、とくに東国との関わりについて若干の検討を試みる。

正徹以来、兼好伝をめぐる記事は少なくないが、その多くはほぼ断片的な材料の羅列に止まっている。江戸時代に入ると、『徒然草』の流行に伴い、作者兼好への関心が高まり、『兼好物語』（宝永三年刊）、『兼好法師伝』（享保十二年刊）、『兼好法師伝記考証』（天保八年刊）など兼好伝と称する著作が数多く現れたが、伝説に類する記事がその大半を占め、資料としての信憑性には乏しい。兼好の存生当時、第三者によって書き残された伝記資料は少ないため、近代の兼好伝記研究は、主に兼好の著書である『徒然草』及び、『兼好法師

[21] 小島孝之校注・訳『沙石集』（新編日本古典文学全集 52、東京：小学館、2001年 8 月）の解説、624 頁。

自撰家集』を手掛かりとして考察されてきたが、戦後になって大徳寺や金沢文庫に兼好書状や関連する古文書が発見され、研究の進展が見られた。その結果、兼好の生涯の輪郭もある程度明らかになってきたのであるが、不明な部分も未だに少なくない。以下は『徒然草』及び、『兼好法師自撰家集』の記事に即しつつ、兼好の伝記について、とくに東国との関係に焦点を据えての検証を試みる。

兼好の生没年は明らかではないが、神道家卜部氏の庶流の出身である。父は治部少輔卜部兼顕。兄弟に大僧正慈遍、民部大輔兼雄がいる。父兼顕は弘安七年（一二八四）の頃から、天皇の御卜に奉仕する宮主として後宇多天皇に仕え、弘安十年十一月二十一日の後宇多天皇退位後も神祇官に勤め、神祇界で相当重きを成していたと考えられる。若き日の兼好について、『正徹物語』は「久我か徳大寺かの諸大夫にてありしなり。官が滝口にて有ければ、内裏のゐにまいりて、つねに玉躰を拝したてまつりけるなり。後宇多院崩御なりしによりて遁世しけるなり。やさしき発心の因縁なり」[22]と伝えているが、風巻景次郎氏は『徒然草』における人名の現れ方を吟味し、『兼好自撰家集』の記事をも検討された結果、出家以前の卜部兼好は久我家に連なる堀川具守家の諸大夫であって、堀川家の縁で正安三年（一三〇一）には六位蔵人として後二条天皇に仕えていたであろうと推論し[23]、現在これが定説になっている。兼好の出家年次とその動機については、確かな記録がないために明らかではないが、現存する大徳寺文書中に「兼好御房」の沽却田に関する書状があり、その文書の末尾に「正和弐年葵丑九月一日」という日付が記されていることから、正和二年（一三一三）にすでに出家していたことが確実視されている。「後宇多院崩御なりしによりて遁世しけるなり。やさしき発心の因縁なり」と、出家契機を後宇多院の崩御（正中元年（一三二四））に結びつけて説く『正徹物語』の記事は、年代的に

[22] 本稿では『正徹物語』の引用は「徹書記物語」(『群書類従』第 10 輯巻第 297、東京都：續群書類従完成會、1937 年）に拠った。
[23] 風巻景次郎「家司兼好の社会圏―徒然草創作時の兼好を彫塑する試み―」『国語国文研究』第 5、6 号、1952 年 3 月・10 月。日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』所収（東京：有精堂、1989 年、175-210 頁）。

これらの史料とは齟齬することになる。その出家動機については、失恋に近い体験があったと説く論者[24]もいれば、後二条天皇の早世が原因であるとの説[25]もあるが、両説いずれについても十分な証拠がなく、直接の原因と看做すのは困難であろう。出家に至るまでの煩悶する心境を窺わせる歌が『兼好自撰家集』に見出されるところから考えても、おそらく兼好は、やはり自らの内面の問題で悩んだ末に出家したのではないかと想像されるのである[26]。

また、兼好の生没年についても確実なことは言い難いが、通説としては弘安六年（一二八三）に誕生したとされている。これは『諸寺過去帳』の「観応年四月八日寂」という記事及び、高野山西光院にある「観応元年四月八日に六十八才で卒した」と記す位牌に基づいて逆算した生年である。しかしながら、観応三年八月二十八日という日付を持つ跋文のある二条良基の百首歌に、兼好が頓阿、慶運とともに加点している史料[27]が残っているので、観応元年以後も生存し、活動していたことは確実である。したがって、弘安六年の誕生説は確かな根拠に乏しいと言わざるを得ないが、その他の資料から復原される兼好伝との間に大きな矛盾が生じないところから、研究者の間では通説に近い形で受け止められている。本稿も些か便宜的ではあるが、弘安六年の誕生説に従って論を進める。

兼好がその生涯において少なくとも二度関東に下向した経験があることは、『兼好自撰家集』の記事によって明らかである。『兼好法

---

[24] 村田正志「兼好法師」『日本歴史』44 号、1952 年 1 月、24-26 頁。
[25] 風巻景次郎氏が一旦想定の上、否定した。「家司兼好の社会圏―徒然草創作時の兼好を彫塑する試み―」を参照。
[26] 稲田利徳「兼好と往生譚」『国文学攷』第 90 号、1981 年 6 月、16 頁。
[27] 『後普光園院殿御百首』（『続群書類従』第 14 輯下和歌部巻 389、続群書類従完成会、1983 年訂正 3 版）の巻頭に、
「　　頓阿
頓阿慶運兼好合点　　慶運
判の詞各頓阿也　　兼好　」という記事が見え、また、巻末に、
「　観応三年八月廿八日
六十八首　　頓阿
七十一首　　慶運
四十二首　　兼好　」と記されていて、加点者として頓阿・慶運・兼好の三人が名を連ねている。頓阿は六十八首、慶運は七十一首、兼好は四十二首に合点したことが知られる。

師自撰家集』[28]には、兼好が鎌倉に下向する道中の歌や、関東滞在中に詠んだ歌が十一首ほど見出される。

東へまかり侍しに、清閑寺にたちよりて、道我僧都にあひて、秋は帰りまでくべきよし申侍しかば、僧都

70 かぎりしる命なりせばめぐりあはん秋ともせめて契りをかまし

返し

71 行すゑの命を知らぬ別れこそ秋ともちぎるたのみなりけれ

みちにてよめる

72 みねの嵐浦わの浪もきゝなれぬかはる旅寝の草のまくらに

東にて、宿のあたりより富士の山のいと近う見ゆれば

73 都にておもひやられし富士の嶺を軒端の丘にいでてみるかな

海のおもてのいとのどかなる夕暮に、鷗のあそぶを

74 夕なぎはなみこそ見えねはるばると沖のかもめのたちゐのみして

こよろぎ磯といふところにて、月を見て

75 こよろぎの磯より遠くひくしほに浮かべる月は沖にいでにけり

武蔵の国金沢といふところに、むかし住みし家のいたう荒れたるにとまりて、月あかき夜

76 ふるさとの浅茅が庭の露のうへに床はくさ葉とやどる月かな

相模の国いたち河といふところにて、このところの名を句の頭にすへて、旅の心を

77 いかにわが立ちにし日より塵のゐて風だにねやをはらはざ

[28] 伊藤敬［ほか］校注『中世和歌集　室町編』（新日本古典文学大系 47、東京：岩波書店、1990 年 6 月）に拠った。歌番号も同書に拠った。

るらん

清見が関にて

78 清見潟なみものどかにはるゝ日は関よりちかき三保の松ばら

田子の浦

79 田子のあまの焼くしほがまは富士の嶺のふもとにたゝぬ煙なりけり

一とせ夜にいりて宇津の山をえ越えずなりしかば、麓なるあやしの庵にたちいり侍しを、このたびはその庵の見えねば

80 一夜ねしかやのまろ屋の跡もなし夢かうつゝか宇津の山ごえ

以上の関東下向歌群の中で、最も注目される歌は「武蔵の国金沢といふところに、むかし住みし家のいたう荒れたるにとまりて云々」という詞書を持つ七十六番歌である。「武蔵の国金沢」とは現在の横浜市金沢区に相当し、『徒然草』第三十四段にも見出される地名であるが、兼好がかつてこの金沢の地に滞在していたことを当該の七十六番歌の詞書から確認し得るのである。言い換えるならば、七十六番歌は少なくとも兼好が二度目に東下した折に詠まれたものと考えられるのである。

『兼好自撰家集』は兼好の閲歴や人間関係、折々の感懐等を知る上で貴重な資料であるが、その巻頭に「家集事」という編集に関する五項の覚書が記されている。それによると、部立による編纂方針を意識的に採用しないこと、また詠歌年次順の配列もとらないこと、そして日記・物語などのように長文の詞書を記すことなど、家集の編纂の通例とは異なる兼好独自の自覚的構成が施されていることが知られる。集中の各歌は相互の連想によって巧みに配列されている。このような家集の編纂方針は『徒然草』の各章段の配列構成にも通ずる部分があると考えられている。

このように、『兼好自撰家集』の編成は必ずしも年次順ではなく、

自由な連想によって編纂されていると考えられるため、前引した七十番から八十番までの一連の関東旅行の歌についてもすべてが同時期に詠われたものとは速断できない。例えば、七十六番歌については詞書の内容からして少なくとも二度目以降の鎌倉下向の際の詠歌と考えられてよいが、「東にて、宿のあたりより富士の山のいと近う見ゆれば」という詞書が付された七十三番歌については、「都にておもひやられし富士の嶺を」という上句の言い回しから考えて、初度の東国行での作と判断するのが自然であろう[29]。しかしながら、他方、当該の十一首の一連の旅行歌を兼好二度目の関東下向の作歌とする説[30]も見られるのである。

七十番歌以降の関東下向歌群中の各歌がそれぞれどの時点で詠まれたのかという作歌年次考証の問題については、現在も明確な解決の糸口は見えないが、七十番歌と及び後述する一〇四番歌の詞書を手掛かりとして、兼好が正和二年以前にすでに関東に赴いた経験があったことは確実視されている。

七十、七十一番歌は関東への旅立ちに際し、清閑寺に立ち寄って道我僧都のもとを訪れ、離別の挨拶を交わした折の贈答歌である。「秋はかへりまでくべき」と訪れてきた兼好に対して、道我は、人間の死期はいつ来るか分からない無常の世なので、秋に帰ると約束するなど解せぬ言葉だと詰問した。それに対して兼好は、行く末いつまでの命か分からぬ身の別れであるからこそ、せめて秋までの命を頼むのだと返歌するが、詠歌事情は「東へまかり侍しに、清閑寺にたちよりて、道我僧都にあひて、秋は帰りまでくべきよし申侍しかば」という詞書により明瞭である。一方、兼好と道我との交渉は『兼好自撰家集』の一〇四、一〇五番歌にも見出される。

---

[29] 七十三番歌について、井上宗雄氏は「最初の旅の歌のようにも思える」(『中世歌壇史の研究　南北朝期』東京：明治書院、1965 年）と述べ、『中世和歌集　室町編』新古典文学大系 47 にも「最初の関東下向の折りの歌か」と脚注を付ける。

[30] 冨倉徳次郎『兼好法師研究』(京都：丁子屋書店、1943 年)、67 頁。

後宇多院よりよめる歌ども召され侍けるに、たてまつるとて僧正道我に申つかはし侍ける

104 人しれずくちはてぬべき言の葉のあまつ空まで風にちるらむ

返し　僧正

105 ことはりやあまつ空より吹く風ぞもりの木の葉をまづさそひける

一〇四番歌の詞書からは、兼好が後宇多院に歌を召されたとき、道我がその仲介役となっているという事情が察せれる。この一〇四番歌の詞書において道我が「僧正」とされていることに注目したい。同一人物について「僧都」と「僧正」とを区別して書き分けるところから考えて、七十番歌と一〇四番歌はそれぞれ違う時期に行われた贈答であり、七十番歌は道我が僧都であった時期に詠まれたものと推定されるのである。

五味文彦氏の考証[31]によると、道我が僧都になったのは徳治三年（一三〇八）正月のことで、正和二年正月に法印になったという。また道我に宛てた後宇多院の院宣に拠ると、正和元年五月十二日が「大納言僧都御房」、同二年六月二十一日が「大納言法印御房」となっている[32]。つまり、詞書に「道我僧都」と書き記す『兼好自撰家集』第七十番歌の作歌時期は、道我が法印になる正和二年以前のことであることは判断されるのである。七十、七十一番の両歌は兼好の遅くとも二度目の東下に際しての贈答歌と考えられるが、第七十番歌の推定詠歌時期から判断すると、兼好の鎌倉行きは正和二年以前の出来事であり、兼好は若い頃すでに東国体験を有していたものと想定されるのである。

以上、『兼好自撰家集』の詠歌内容や詞書を踏まえての検討を試みたが、関東下向の時期や回数については確定できなかったものの、兼好はかつて「武蔵の国金沢」に暫く住んでいて、少なくとも二度

[31] 五味文彦『『徒然草』の歴史学』朝日選書 577、東京：朝日新聞社、1997 年。
[32] 『鎌倉遺文』古文書編第 32 巻、二四六〇二号・二四八九八号（竹内理三編、東京：東京堂出版、1982 年）。

に亘って以上関東に下向した経験があること、さらに言うならば、三十代以前のかなり若い頃にすでに東下したことがあるのはほぼ確実である。要するに、兼好は関東との縁が甚だ深かったと考えられるのである。

続いて、『徒然草』[33]中に見出される東国を背景とする幾つかの章段を取り上げ、兼好と関東との関係について更なる考察を試みたい。

（第三十四段）

甲香は、ほら貝の様なるが、小さくて、口のほどの細長にさし出でたる貝の蓋なり。武蔵国金沢といふ浦にありしを、所の物は、「へなたりと申侍」とぞ言ひし。

三十四段は事物考証の章段である。「甲香」という練香の材料となる貝の形状を説明した上で、それを武蔵国金沢の浦では、「へなたり」と言っているという事実を紹介するだけの極めて短い章段であるが、「武蔵国金沢といふ浦にありしを、所の物は、「へなたりと申侍」とぞ言ひし」という一文の中に、体験による過去回想の助動詞「き」が多用されているところに注意したい。「けり」が話し手の非体験の回想、つまり他者から伝え聞いた過去の事実を述べる時に使う助動詞に対して、「き」は自ら経験した事柄についての回想に用いられる。「けり」と「き」との使い分けは『徒然草』においてかなり意識的に為されていると広く認められている[34]。つまり、三十四段は兼好が武蔵の国金沢の浦に赴き、そこで直接見聞した話を記録したものであると考えられるのである。以上の推論については『兼好自撰家集』にも裏付けになる材料を見出し得る。先述したように、『兼好自撰家集』第七十六番歌の詞書には「武蔵の国金沢」という地名が見出され、そこに兼好の「むかし住みし家」があったということが記されている。「武蔵の国金沢」を「ふるさと」とする『兼好自撰家集』第七十六番歌の詠歌内容と直接体験を回想する助動詞「き」が多用

[33] 本稿では、『徒然草』の本文は正徹本を底本とした『方丈記・徒然草』（新日本古典文学大系 39、東京：岩波書店、1996 年）に拠った。正徹本に欠けている部分が他本によって補われている箇所には、〔　〕を付けた。
[34] 白石大二「『徒然草』における助動詞「き」「けり」－表現の真実の理解のために－」『月刊文法』第二巻七号、1970 年 5 月号。

されている『徒然草』三十四段の記事とはよく符合するのであって、三十四段は兼好の関東生活における見聞を記す章段であると理解されるのである。

兼好が自身の関東滞留の経験に基づいて書いたと思われる記事は、十九段と百十九段にも見出すことができる。

（第百十九段）

鎌倉の海に、鰹といふ魚は、かの境にはさうなき物にて、此比もてなす物なり。それも、鎌倉の年寄りの申侍しは、「此魚、をのれらが若かりし世までは、はかばかしき人の前へ出づること侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍し物なり」と申き。

かやうの物、世の末になれば、上ざままでも入立つわざにこそ侍なれ。

百十九段は鎌倉における鰹の扱いについて述べる。鎌倉では最近になって鰹を珍重するようになったが、当地に住む老人の言によれば、自分が若い頃は鰹は下等の魚とされてもてはやすものではなかったとされる。しかしながら、このような物であっても、世の末となると、上つ方の食膳にまで登場することになるのであって、尚古主義者兼好の嘆かわしい表情を窺わせるような章段である。鎌倉の古老の発言を「鎌倉の年寄りの申侍しは、（中略）と申き」とのように、直接経験を示す助動詞「き」を用いて記し留めているところから考えると、兼好はこの発言を直接本人から聞いたものと判断される。つまり、百十九段は三十四段と同様、兼好の関東下向の経験にもとづく記事であると理解されるのである。

また、四季の風物についての随想を述べる第十九段には、大晦日の夜の「魂祭」に関して、「なき人の来る夜とて魂祭るわざは、この比都にはなきを、東の方には猶することにてありしこそ、あはれなりしか」という記事が見出される。古く都で行われた歳末の行事が東国に残存していることに驚きを感じて「あはれなりしか」という感慨を漏らす兼好であるが、「東の方には猶することにてありしこそ、

あはれなりしか」とのように、直接体験の助動詞「き」を用いているところから考えて、自身、東国で年を越して大晦日の夜に行われた魂祭りを見た経験があったものと推量される。以上検討してきた如く、『徒然草』第十九、三十四、百十九段の諸段には、兼好の関東生活における実地の見聞が反映していると思量されるのである。

兼好が関東の地と深い繋がりを有する事情については、『兼好自撰家集』と『徒然草』の記事がよく証し立てているが、彼がどのような目的で、またどのような人脈を辿って関東に下向したかについてはまだ解明されていない。林瑞榮氏は、兼好がかつて住んでいた「武蔵の国金沢」の金沢文庫に伝わる兼好書状と言われる文書とそれに関連する古文書を手掛かりとして、兼好の出自について考察されている[35]。金沢文庫は北条氏の一支流に出て幕政の要職を務めた金沢実時の創建に成るもので、金沢氏の領地である「武蔵の国金沢」内の称名寺に設立された。同文庫には兼好書状と認められる懸紙二枚と、末尾を欠いた消息文とが現存する。また、兼好の名を呼び捨ての形で書き込んでいる、金沢貞顕の執事掃部助倉栖兼雄の書状も同文庫に伝存する。林瑞榮氏は如上の書状や古文書類を『兼好自撰家集』及び、『徒然草』の記事内容に照合しつつ調査検討された上で、倉栖兼雄は『卜部氏系図』において兼好の兄とされている兼雄であり、兼好は関東出身関東育ちで、卜部兼顕の猶子であるという説を立てられた。しかしながらその後、高梨みどり氏は、倉栖兼雄の書状とされる文書は実質的には、兼雄が代筆を務めた金沢貞顕からの書状であることを明らかにされた[36]。また、鎌田元雄氏は倉栖兼雄と卜部兼雄とを同一人物と認定する手続きについて批判を加えられている[37]。林瑞栄氏の示された兼好関東出身説は確実なものとは言

[35] 林瑞榮『兼好発掘』東京：筑摩書房、1983 年 2 月。以下林氏の説は同書を参照。
[36] 高梨みどり「金沢文庫古文書五五四書状について」『金沢文庫研究』第 91、92 号、1963 年 6、7 月。
[37] 鎌田元雄「兼好の周辺」(『文学』30 巻 10 号、1962 年 10 月)、「兼好の周辺（補遺）」(『駒沢国文』第 3 号、1964 年 5 月)。日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』(東京：有精堂、1975 年、249-270 頁）に所収。以下鎌田元雄説の引用は同論文に拠る。

い難いのである。

林氏の立論の根拠となった諸資料に詳細な吟味を加えられた鎌田元雄氏は、当時の時代背景を踏まえて兼好の家系を丹念に調査された上で、兼好の関東下向の機縁を祖父兼名及び兼名を中心に形成されていた関東の卜部一族との関係に求められている。また、在俗時の兼好が堀川家の家司であって堀川家に親しかったことにも着目されているが、穏当な推論であるように思われる。鎌田氏の考察されるところでは、卜部氏は父祖の代から関東に由縁がり、兼好の祖父兼名は既に仁治・寛元の頃幕府に奉公していて鎌倉に住むことが多く、若い頃からすでに関東に下着していたことが判明する。また、兼好が仕えていた堀川具守の弟基俊は『徒然草』九十九段と百六十二段に登場する人物であるが、弘安八年（一二八五）から九年にかけて検非違使別当を務めた後、まもなく関東に下り、鎌倉に止住して将軍久明親王の側近として活躍した。兼好の再度にわたる関東下向は祖父兼名との関係とともに、この堀川基俊との関係も併せて考慮すべきであろう。兼好が「武蔵の国金沢」の地を「ふるさと」と歌うのは出身地を意味してのものではなく、父祖の代に結ばれた地縁関係を背景とする可能性が考えられてよい。

他方、『徒然草』の中には東国文化に対する偏見、もしくは蔑視の如き意識の存在を窺い得る記事が散見される。この事実は、兼好を関東出身と見る説にとって少なからぬ障碍となるであろう。以下は、『徒然草』中の記事に窺われる兼好の対東国意識について若干の検討を試みる。

（第百四十一段）

悲田院の尭蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、左右なき武者也。故郷の人の来て物語りすとて、「吾妻人こそ、言ひつる事は頼まるれ。都の人は言受けのみよくて、まことなし」と言ひしを、聖、「それはさこそおぼすらめど、をのれは宮こに久しく住み馴れて見侍に、人の心劣れりとは思侍らず。なべて心やはらかに、情あるゆへに、人の言ふほどの事、けやけくいな

びがたくて、よろづえ言ひ放たず、心よ〔は〕く言受けしつ。偽りせんとは思はねど、乏しく、叶はぬ人のみあれば、をのづから本意通らぬこと多かるべし。吾妻人は、我方なれど、げには心の色なく、情おくれ、ひとへにすくよかなる物なれば、初めより、「いな」と言ひてやみぬ、賑ひ豊かなれば、人には頼まるゝぞかし」と、ことはられ侍しこそ、此聖、声うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることはり、いとわきまへずもやと思ひしに、この一言葉の後、心にくゝなりて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、かくやはらぎたるところのありて、その益もあるにこそと覚え侍し。

本段は尭蓮上人の人柄の奥ゆかしさとその人間理解の豊かさ深さに感銘を受けて書き記された章段であるが、東国出身で現在は京都に在住する尭蓮の発言は、見事な東国人と都人の気質を鮮やかに比較対照した見事な風土論、文明論であるとも評せよう。外面的な言動だけから人柄の良し悪しを判断するのではなく、東国・西国各々の人情・気質、さらには経済生活までも視野に入れ、人間をその生きている実生活の相において理解する尭蓮のしなやかで柔軟なものの考え方に、兼好は深く感服したものと思われる。しかしながら、「此聖、声うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることはり、いとわきまへずもやと思ひしに、この一言葉の後、心にくゝなりて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、かくやはらぎたるところのありて、その益もあるにこそと覚え侍し」と兼好自身の心境の変化を綴った末尾の一文からは、兼好の側に東国への偏見があったことをも窺い得るのである。東国なまりがひどく、粗野な声音の持ち主である尭蓮は仏典の微妙な道理をあまり理解していないのではないかと当初に兼好は思っていたのであるが、その話に耳を傾けているうちに、尭蓮の柔軟なものの考え方や細やかな人間観察に感銘を覚え、認識を改めたとする。「声うちゆがみ、あらあらしくて」ということだけで、「聖教のこまやかなることはり、いとわきまへずもや」という判断を兼好が抱いてしまった背景には、東国への蔑視と、

偏見があったことが想定される。政治面、経済面において優位に立つ関東に対して、文化の優越性を誇示する都人の論理が、本段における兼好の思想のプロセスにも垣間見られるのである。

（第百四十二段）

心なしと見る者も、よき一言は言ふ物なり。ある荒夷の恐ろしげなるが、かたえにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答しかば、「さては、物のあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむと、いと恐ろし。子ゆへにこそ〔万の〕あはれは思ひ知らるれ」と言ひたりし、さもありぬべきことなり。恩愛の道ならでは、かゝる者の心に慈悲ありなんや。孝養の心なき者も、子持ちてこそ親の心ざしは思ひ知るなれ。（後略）

百四十二段の前半は前段における尭蓮上人の「一言葉」を受けて、ある荒夷の「よき一言」を挙げ、親子の問題と絡めて慈悲心を論じている。荒夷とは都人が東国人、とくに東国武士のことを指していう称呼であるが、ある荒夷の「子ゆへにこそ〔万の〕あはれは思ひ知らるれ」という言葉に兼好は共感を覚え、仏教の「慈悲」に通うものとして、子を思う「恩愛の道」を位置付ける、在俗者にとっては「恩愛」が「慈悲」に通ずる価値として認められるのである。他方、冒頭に「心なしと見る者も、よき一言は言ふ物なり」と記した上で、荒夷の逸話を例に引き、話題を展開させて行く本段の構成には、関東に対する兼好の先入観めいたものの存在がやはり垣間見られる。「ある荒夷」を「心なしと見る者」と把握することは、関東への蔑視を前提とする思考の現れであると理解されるからである。

兼好は京都育ちの京都人だからこそ、文化的に都と比肩できない関東に対して優越感を持ち、そのことがこれまで掲げてきたような『徒然草』中の文言に投影しているのであろう。しかしながら、既に父祖の代において関東との地縁を有し、自らも若年時に東国に滞在したことがあり、その後も東下の経験を有する兼好が、通常の都人士の水準を越えて関東圏との親密な繋がりを保持していたことは

確かである。島内裕子氏は、『徒然草』における倹約を基盤とする政道論や動物愛護、酒に関する記述などの背後に、鎌倉武士の価値観、行動規範との共通性を見出され、『徒然草』における関東体験の広汎な影響力を論じられている[38]。『徒然草』に見られる兼好のものの感じ方、考え方に東国の影がいかに大きく落ちているかということが、あらためて確認されるのである。

四、終わりに

以上、無住と兼好の伝記について概観したが、年齢の上では六十歳ほどの隔たりがあるものの、両者の生涯がともに東国の地に深く関わり、言わば共通の地縁を持っていたことが確認された。無住は徹頭徹尾東国の人であるが、顕密禅教の諸宗を学んで東福寺の弁円に帰依し、『沙石集』以下の著述によってその名を広く知られていた。医術に関して高い知識や能力を有していたことも注目される。一方、兼好は『沙石集』が完成した年に生まれ、関東に下着した祖父兼名以来の繋がりに加えて、関東と都とのパイプ役を務めた堀川家に近しいことも相俟って、自身も東国滞在の経験があり、関東とはかなり親密な立場にあった。「武蔵の国金沢」を「ふるさと」と呼ぶ家集の記事や、『徒然草』に記される東国関連章段からは、兼好の人生に及ぼした関東の影響が甚だ深いものであった事情をよく読み取り得るのである。両者の生存時期の重なりを再度確認すると、兼好が生まれた弘安八年には無住が五十八歳で『沙石集』を完成し、正和元年十月、兼好三十歳の時に無住が没したことになる。両者は三十年ほど同時代をともに生きていた。先述した如く、正和二年以前、無住がまだ生存していた時期に、兼好は既に東国への下向を経験していた。その折に、東福寺との親密な関係を保ちつつ東国の文化圏に無視できぬ位置を占めていた無住その人や、彼の著書『沙石集』に関する情報が耳に入ったことも十分に想像される。そして、その事

[38] 島内裕子「中世武家家訓と徒然草」(『国語と国文学』63 巻 1 号、1986 年 1 月)、31-43 頁。

実を裏付ける直接の証拠は見出されないものの、何らかの機会に「讃敗相半」の世評を得ていた『沙石集』に触れ、入手した可能性はかなり高いのではないかとも考えられる。兼好が医薬を重視していたことは、教養人の資格の条件に「医術を習ふべし」の一条を挙げる『徒然草』百二十二段や、「良き友」として「医師」を挙げる『徒然草』百十七段の記事からもよく窺われるが、無住もまた医療技術に通じ、東福寺派医術の祖と伝えられるほどの人物であった。医術への関心を介して、兼好が無住の存在に注目していた可能性も小さくないであろう。無住は尾州木賀崎の長母寺に入寺してから後は、時々の旅に出かける以外は、ほとんど著作活動や弟子の教化に明け暮れていた。若き兼好は無住の晩年に相当する時期に関東に下向、滞在していたが、その折にしばしば無住の風聞を耳にし、ついに都において書写され、流布していた『沙石集』を参看する機会があったのではないかと推察されるのである。

参考文献

黒田亮（1939）「無住と兼好」『文学』第 7 巻第 6 号、94-96 頁
冨倉徳次郎（1943）『兼好法師研究』丁子屋書店
村田正志（1952）「兼好法師」『日本歴史』44 号、24-26 頁
風巻景次郎（1952）「家司兼好の社会圏―徒然草創作時の兼好を彫塑する試み―」『国語国文研究』第 5、6 号。日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』(有精堂、1989 年)に所収、175-210 頁
田辺爵（1962）『徒然草諸注集成』右文書院
鎌田元雄（1962）「兼好の周辺」『文学』30 巻 10 号、（1964）「兼好の周辺（補遺）」『駒沢国文』第 3 号。日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』（有精堂、1975 年）に所収、249-270 頁
西尾光一（1963）『中世説話文学論』塙書房
冨倉徳次郎（1964）『卜部兼好』吉川弘文館
井上宗雄氏（1965）『中世歌壇史の研究　南北朝期』明治書院
高乗勲（1968）『徒然草の研究』自治日報社

安良岡康作(1972)『徒然草全注釈上下』日本古典評釈全注釈叢書　角川書店

小島孝之（1975)「無住伝記小考―医術と思想とをめぐって―」『国語と国文学』52 巻 12 号、41-53 頁

伊藤博之司会（1976)『中世の隠者文学　シンポジウム日本文学六』学生社

五味文彦(1977)『『徒然草』の歴史学』朝日選書

久保田淳「徒然草評釈」（1978・5～）『国文学解釈と教材の研究』学燈社に連載中

三木紀人（1979)『徒然草全訳注（一）～（四)』講談社学術文庫

稲田利徳（1981)「兼好と往生譚」『国文学攷』第 90 号、9-18 頁

林瑞榮（1983)『兼好発掘』筑摩書房

島内裕子（1986)「中世武家家訓と徒然草」『国語と国文学』63 巻 1 号、31-43 頁

三木紀人（1989)「隠遁文人の世界　徒然草」『日本文学講座七　日記・随筆・記録』大修館

三木紀人（1989)「無住の略伝」『無住・虎関』中央公論社

伊藤敬[ほか]校注（1990)『中世和歌集　室町編』新日本古典文学大系 47 岩波書店

三木紀人（1993)「沙石集・雑談集」『説話集の世界Ⅱ－中世－　説話の講座 5』勉誠社

小島孝之校注・訳（2001)『沙石集』新編日本古典文学全集 52　小学館

久保田淳(1996)「徒然草、その作者と時代」『方丈記・徒然草』新古典文学大系 39　岩波書店

稲田利徳（2001)『徒然草』古典名作リーディング 4　貴重本刊行会

小島孝之（2002)「無住の 26 説話受容と東国文化圏」『国文学解釈と鑑賞』通巻 858、130-135 頁